生誕 200 年

松浦武四郎が見た渚滑川（しょこつがわ）

安政 5 年の踏査（とうさ）を辿（たど）る

伊勢生まれの探検家・武四郎

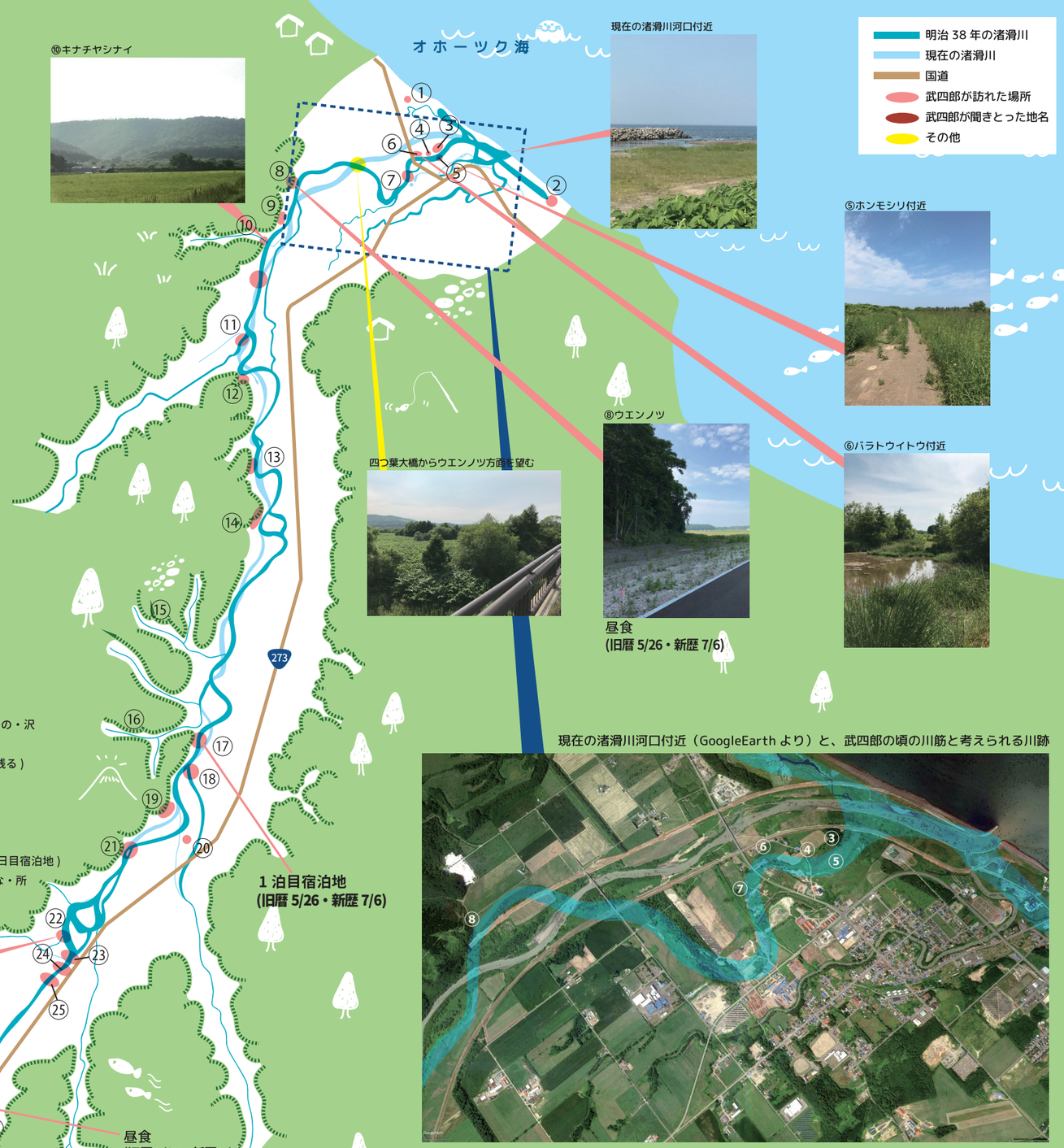
1818 年、伊勢に生まれた松浦武四郎は、17 才で諸国遊歴の旅に出る。
武四郎は、蝦夷地を 6 度踏査しているが、そのうち 3 度紋別を訪れている。

1 度目～ 1846(弘化 3) 年　紋別に寄港して宿泊。河口から数キロ入り、夕暮れを眺望し、黒曜石を持ち帰る。（旧暦 7 月 24・25 日）29 才
2 度目～ 1856(安政 3) 年　渚滑川河口から 1km 程入る。
3 度目～ 1858(安政 5) 年　渚滑川を遡り、滝上町濁川のオシラネップ川川口まで往復 3 日かけて踏査。（旧暦 5 月 26 ～ 28 日）41 才
この時の記録を志与古津（しょこつ）日誌として記す。

志与古津（しょこつ）日誌に出てくる渚滑川すじの地名

河口より踏査最深地まで

①ウ ト レ イ　（河口付近北側の集落）　ウレ・トゥィェ　赤い・きれている所　（人家 3 軒）
②ト ラ エ ト　（その手前左奥）　トライ・エトゥ　湿地の水たまり・奥
③ベ ツ モ シ リ　ペッモシリ　川・島　（人家 1 軒）
④ホ ン ト ウ　（沼）　ポン・ト　小さい・沼
⑤ホ ン モ シ リ　（小島）　ポン・モシリ　小さい・島
⑥パラトウイトウ　パラ・トゥ・イトゥ　広い・沼・奥　（人家 2 軒）
⑦ホ ロ ヒ タ ラ　ポロ・ピタラ　大きい・小石川原　（人家 2 軒）
⑧ウ エ ン ノ ツ　（渚滑 6・7 線の向う岸）　ウェン・ノッ　悪い・崎 (がけ)　（人家 4 軒　昼食）
⑨ホ ン ピ ラ　ポン・ピラ　小さい・がけ
⑩キナチヤシナイ　キナ・チャ・ウシ・ナィ　（敷物にする）草・を刈る・よくする・沢　上流に人家 2 軒
⑪ウ ツ ナ イ　（宇津々川）　ウッ・ナィ　脇・川
⑫ショウマナイ　スオマィ　津波
⑬チトカンヒラ　（13 線川向）　チ・トゥカン・ピラ　我ら・矢を射る・がけ
⑭シ ユ マ ウ ニ　スマ・ウニ・ィ　石・ある・ところ（墓地が残る）
⑮ホンヲサツナイ　（中渚滑）　ポン・オサッ・ナィ　小さい・川尻・乾いている沢
⑯ホロヲサツナイ　ポロ・オサッ・ナィ　大きい・川尻・乾いている沢
⑰チ ラ イ ヲ ツ　チライ・オッ　イトウ・多くいる　（1 日目宿泊地）
⑱サトサツナイ　（鴻輝川）
⑲エ イ シ リ　エエィ・シリ　とんがっている・山
⑳シイリヤウニ　シ・リャ・ウニ　本当の・越冬する・家
㉑ヒ ラ ボ　ピラ・ポ　がけ・小さい
㉒ヲワフンベナイ　（和訓辺川）　オ・アフン・ペ・ナィ　川口・入り組んでいる・もの・沢
㉓シ ユ マ ム イ　（上渚滑）　シユマ・ムイ　石・入江のように入り組んだところ
㉔イ チ ヤ ヌ ニ　イチャ・ヌニ・イ　サケマスの産卵場・ある・ところ　（墓地が残る）
㉕シベウチブト　シペ・オツ・チャロ　サケ・多くいる・川口
㉖チ ヤ シ コ ツ　チャシ・コッ　とりで・跡　（昼食）
㉗シラルンナイ　シラ・アル・ン・ナィ　山・の片方・にある・沢
㉘ク ア マ ナ イ　（39 線）　ク・アマ・ナィ　仕かけ弓・を置く・沢
㉙タ ツ シ　（奥東、立牛川）　タト・ゥシィ　樺皮・たくさんある・所　（2 日目宿泊地）
㉚ヲシラン子フ　（オシラネップ川）　オ・シラ・ネ・プ　川尻・その岩・のような・所



武四郎が聞きとった地名

オシラン子フからサクルー川合流点まで

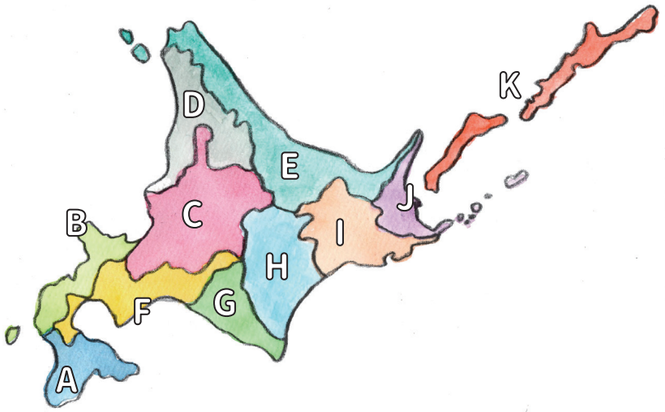
❶ハンケヲチンナイ　（パンケオチンナイ川）パンケ・オ・チン・ナィ　川下の・川尻・がけ・沢
❷ヘンケヲチンナイ　（五十三川）　ペンケ・オ・チン・ナィ　川上の・川尻・がけ・沢
❸パンケウナウケベ　パンケ・ウナゥケプ　川下の・鉤を掛けて登る所
❹ホ ロ ソ ウ（滝上）　ポロ・ソ　大きい・滝
❺ヘンケウナウケベ　ヘンケ・ウナゥケプ　川上の・鉤を掛けて登る所
❻ヘ テ ウ コ ヒ（合流部）　ペテウコピ　川の合流点

1、松浦武四郎の生涯

松浦武四郎は、文化15（1818）年2月6日、伊勢国一志郡須川村（現・三重県松阪市小野江町）の郷士・松浦家の四男として生まれました。幼いころから旅にあこがれ、青年期には北は東北地方から南は東北地方から南は九州地方まで、日本中を旅して回りました。

長崎に滞在していた26才の頃、長崎の町名主から口シアが日本へ南下してくるかもしれないという話を聞き、「蝦夷地」と呼ばれていた北海道に強い関心を抱きます。そして弘化2（1845）年から安政5（1858）年にかけて、一介の志士として3回、幕府に雇われた身分で3回、都合6回にわたって蝦夷地を踏査し、多数の紀行文や地図をまとめ、蝦夷地の実情を明らかにしました。

また、踏査にあたってはアイヌ民族の助けを借り、彼らと交流する中で、アイヌ文化への理解を深め、彼らを悲惨な状態に追いやった場所請負制や松前藩を強く批判します。明治維新後、新政府は、蝦夷地の「開拓」を進めるにあたって、蝦夷地に関する知識の第一人者であった武四郎に期待し、役人として登用します。そして明治2（1869）年、武四郎の提案をふまえ、蝦夷地を「北海道」と改称し、道内に、例えば「北見国紋別郡」といった国や郡を置きました。



A	渡島国	G	日高国
B	後志国	H	十勝国
C	石狩国	I	釧路国
D	天塩国	J	根室国
E	北見国	K	千島国
F	胆振国		

3、「蝦夷地」から「北海道」へ

～開拓判官と北海道の「命名」～

慶応4（1868）年、閏4月、武四郎は大久保利通の推挙もあり、新政府から徴志士箱館府判府事を命ぜられました。そして、明治2（1869）年6月には蝦夷開拓御用掛を、さらに新たに設けられた開拓使では開拓判官という重役を命ぜられます。

武四郎が担った仕事の中に、蝦夷地に変わる新しい名称の選定と国郡の設定がありました。新政府は「五畿七道」や国郡制を、江戸時代までは形式上〝異域〟とされていた蝦夷地に適用し、国内外に向けて蝦夷地が日本の領土であることを宣言しようとしたのです。武四郎が提出した原案は、「日高見道」「北加伊道」「海北道」「海島道」「東北道」「千島道」の6つでしたが、この中の「北加伊道」が採用されて「北海道」と改称されました。また、道内には渡島、後志、石狩、手塩、北見、胆振、日高、十勝、釧路、根室、千島の11国と紋別、常呂、網走、斜里など86の郡を設置しました。これらは現在でも多くが北海道の総合振興局や郡の境のもとになっています。

しかし、武四郎は、新政府の下でも、江戸時代にアイヌ民族を苦しめていた場所請負制の悪癖が一掃されないことに失望して、明治3（1870）年、辞表を提出し、職を辞しました。ただ、旺盛な好奇心や探究心は衰えることなく、趣味人として、また、旅人としての晩年を送り、明治21（1888）年2月10日、東京の自宅でこの世を去りました。2018年には生誕200年を迎えます。

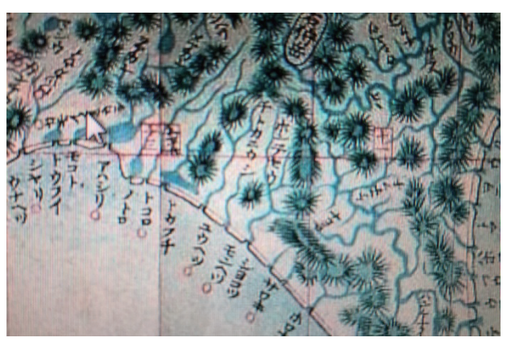
2、蝦夷地の踏査

～蝦夷地の紀行文と地図～

弘化2（1845）年から嘉永2（1849）年にかけて東西蝦夷地や樺太、国後島・択捉島を調査した結果は、嘉永3（1850）年に『初航蝦夷日誌』『再航蝦夷日誌』『三航蝦夷日誌』計35巻にまとめられました。安政3（1856）年から安政5（1858）年の幕府雇いとしての踏査の結果は、『武四郎廻浦日記』30巻、『丁巳東西蝦夷山川地理取調日記』24巻、『戊午東西蝦夷山川地理取調日記』61巻にまとめられ、幕府の箱館奉行所に報告されました。『志与古津日誌』はこの『戊午日記』の一部です。

また、全6回の踏査に基づいて作製された代表的な地図には、『三航蝦夷全図』、『東西蝦夷山川地理取調図』などがあります。

これらの紀行文と地図は、その内容の詳しさと量において、それまでのものと比べ、群を抜いており、蝦夷地内陸部の全体像が明らかにされたと言えます。



4、武四郎とアイヌ民族

武四郎は、道案内人としてアイヌ民族の協力を得て、彼らと寝食をともにしながら蝦夷地踏査を行いました。その過程で、アイヌ民族が、神を敬い、素直で心の優しい人たちであることを知り、その性格を愛するとともに、彼らが極めて悲惨な生活状態に置かれていることを目の当たりにしました。そして、そのような状態に追いやった場所請負商人や、現地の支配人・番人たちの非法、松前藩の圧政に厳しい批判の目を向けるにあたりました。

アイヌ民族に心を寄せる武四郎の姿勢は、『近世蝦夷人物誌』や、数多くの蝦夷日誌の中にうかがうことができます。

武四郎が提案した「北加伊道」の「加伊」は、アイヌ語でアイヌ民族をさす「カイ」に漢字をあてたものでした。北海道はアイヌ民族の大地である、という武四郎の想いが込められているのではないかと考えられています。

その中に一筋の滝がある。アイヌ民族は舟でここを下る際には、必ずここへ矢を一本ずつ射るとのこと。また、上る時には必ずここに木幣（イナウ）を削って立て置くという。

（『志与古津日誌』より）

出発の際、私が今回山の中で笠をなくしたことを、イボレサンは深く憐れんで、自分で作ったキナ笠を一枚くれた。

（『志与古津日誌』より）

ウエンノツという村には人家が四軒ある。一軒は一人暮らしだったが、宗谷（場所）にやられ、二軒目は六十過ぎの老夫婦と息子がいたが、息子たちは宗谷にやられ、家には五、六才の女の子と病身の妻だけが残っている。

（『近世蝦夷人物誌』より）

作成　しょこつがわ連携研究会